HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈奇連共欣賞〉 『火星大情人』を欣賞する ： 異星の核戦争をテーマにした結末不明の怪作
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 4, 183-190
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98423
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98423
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_183-190.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第４号　2015年２月
〈奇連共欣賞〉

『火星大情人』を欣賞する
—— 異星の核戦争をテーマにした結末不明の怪作

武田 雅哉

中国のＳＦ小説の流れのひとつには、旧来の武侠小説の主人公たちが駆使する魔法的な武器——いわゆる「法宝（ファーパオ）」「宝貝（パオペイ）」のかわりに、かれらに科学的ふうな「法宝」を持たせてみようという流派があった。

碧荷館主人（へきかかんしゅじん）『新紀元』（1908）は、黄白人種戦争がテーマの、清末小説である。未来の「西暦1999年」、中国の皇帝は、全地球の黄色人種は「黄帝紀元」を使用すべきであるとの議決をした。これを黄色人種による世界制覇のさきがけとみなした西洋列国は、白人国家による同盟を結成し、地球には緊張状態が生じる。ついには中国と西欧世界は戦争となり、それぞれの科学者が発明した科学的「法宝」で戦うことになる。中国が西洋に派遣した大艦隊は、西洋艦隊をつぎつぎと打ち破り、大勝利のはて、世界を征服してしまうのである。

許指厳（きょしげん）『電世界』（1909）は、21世紀における「清朝」の天才科学者黄震球（こうしんきゅう）、ひと呼んで「電学大王」が発明、開発、建設したオール電化ユートピアの物語である。かれもまた、黄禍論を唱えて、中国の都市爆撃に飛来してきた西欧の空中艦隊を一瞬にして壊滅させ、最後には、不完全な人類を補完する方法を求めて宇宙に旅立っていく。

陸士諤（りくしがく）『新野叟曝言（しんやそうばくげん）』（1909）も、やっぱりまず最初にかたづけなければならないお仕事が「世界征服」！　しこうして月世界を征服し、さらには巨大な宇宙艦で木星にまで飛び立つという壮大なスペース・オデッセイである！

これらはいずれも、邦訳はほぼできているので、いずれ日本のよいこたちにもおとどけできる日が到来するかもしれない。

そのような清末ＳＦ小説を継承したのかどうか、民国時期の連環画には、タイトルに「科学」の二文字を冠したものが多く見られる。『科学飛行炮』『科学研究炮』『科学夢遊記』『科学封神榜』など。陳光鎰の『科学封神榜』（1946）は、『封神演義』の登場人物たちが、「科学」をまとった武器でチャンバラを繰り広げるものである。

傑作や駄作などの観念を超越した作品が、この宇宙のなにかのめぐりあわせで生まれてくる。連環画も例外ではない。そんな奇態な連環画を発掘して、共に欣賞してみたい。発掘とはいえ、土中より日の光にさらけ出されるものは、金銀財宝のたぐいとはかぎらず、つまらぬ茶碗のかけらかもしれないが。

ここにある一冊の連環画。おそらく二冊以上でセットを成すものであったと思われるが、いまはこの一冊しかない。表紙も奥付もなく、最後のほうも、途中でページが紛失している可能性がある。

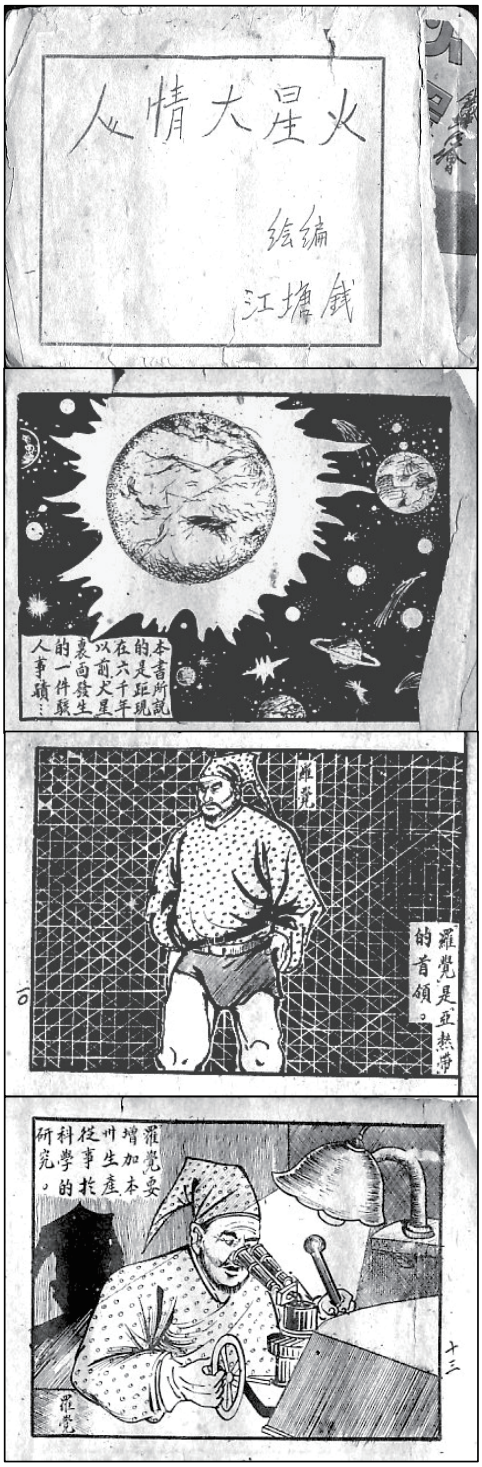
内扉に『火星大情人』とのタイトルが見え、「編絵　銭塘江」とある。右端にかろうじて一部残存している表紙には、赤字で「火星」の一部と「銭塘江絵」の文字がうかがえる。タイトルが火星であるからにはＳＦであるはずだ。きょうはこれを掘り出してみよう。

物語は、スペース・オペラの原点とばかりに、漆黒の宇宙空間から始まる……。

「宇宙。それは循環し旋転する世界。そこには驚異があふれている。この物語は、いまから六千年前の火星で発生した、ある、驚くべき事件である……」とナレーション（5齣）。

この人を見よ！　水玉模様のトンガリ帽子に、ゆったりとした上着。下は対照的に、男伊達（だて）のブリーフ一丁。グリッドを背景にして颯爽と立つ、強面（こわもて）の、おちゃめすぎるおっちゃん。かれこそは、火星の亜熱帯にある「烈炎（あちあち）国」の首領（ドン）、羅覚（ルオチャオ）なのであった（10齣）。

かれは人民を指導して、岩塩の採取をしていた。あるとき亜熱帯の火山が噴火して、多



くが犠牲になった。科学者でもある羅覚は、農産物の増大を図り、人工降雨の研究に余念がない。おかげで多少は生産が伸びたものの、まだまだ足りなかった（13齣）。

火星の温帯にある「温和国」の首領、藍爾夫もまた、すぐれた科学者である（18齣）。

温和国はおだやかな気候風土に恵まれて、人びとは平和に暮らしていた。地震もなく、巨大なビルも多く建てられていた。

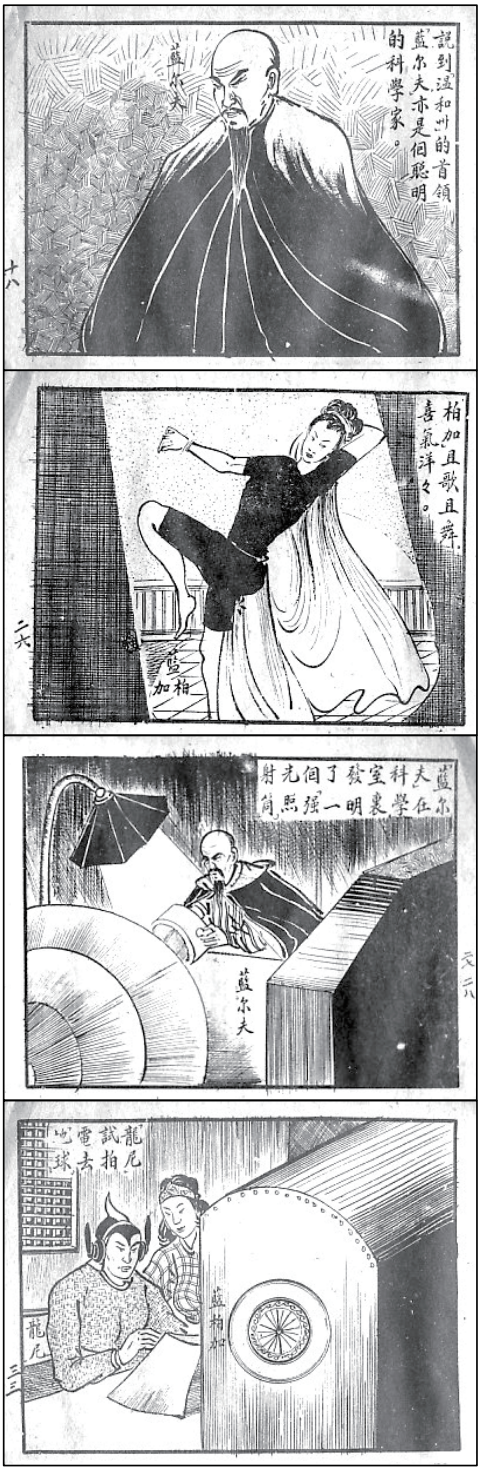
藍爾夫には、藍柏加という娘がいた。そして彼女には龍尼という夫がいた。温和国での楽しい舞踏会で、なぜかひとり妖艶な踊りを披露する柏加。どうやら火星でも「藍」は姓で「柏加」が名らしい（26齣）。

藍爾夫は、研究室で、「強光照射筒」なるものを発明した。この光線を雨雲に照射すると、雲は十万里に渡って消滅し、空はからりと晴れわたるのであった（28齣）。

また藍爾夫は、柏加、龍尼とともに望遠鏡で地球を観察した。かれらが見たのは、まだ太古の時代のわれらが地球であった。

藍爾夫は、「火箭機」すなわちロケットを完成させようとしていた。これに乗って、地球探険に行こうという計画であった。

龍尼と藍柏加は、地球に向けて無線電信を試みた。強力な電波は、宇宙空間を貫き、そのまま地球にまで到達したはずなのだが、地球からは、まったく返信がなかったのであった（33齣）。



そのころ羅覚は、さまざまな種類の兵器を発明していた。あろうことか羅覚は、温和国への進攻を計画していたのである！

烈炎国は人口過剰に悩んでいる。全国民を養うには、食糧が絶対的に不足している。これを解決するには、温和国を侵略するしかない。羅覚はそういう結論に達したのだ。

新兵器「電動飛雷」を高空に飛ばし、そのすぐれた性能を確認したりする（38齣）。

羅覚は温和国に向けて宣戦布告の電報を発した。「藍首領よ、われわれはおまえたちの地域への進攻を決定した。わが兵器が恐ろしければ、速やかに降伏せよ！」

藍爾夫、柏加、龍尼は、羅覚の宣言を聞いて怒りに震えた。かれらは羅覚の進攻に対抗すべく、対策を講じた（45齣）。

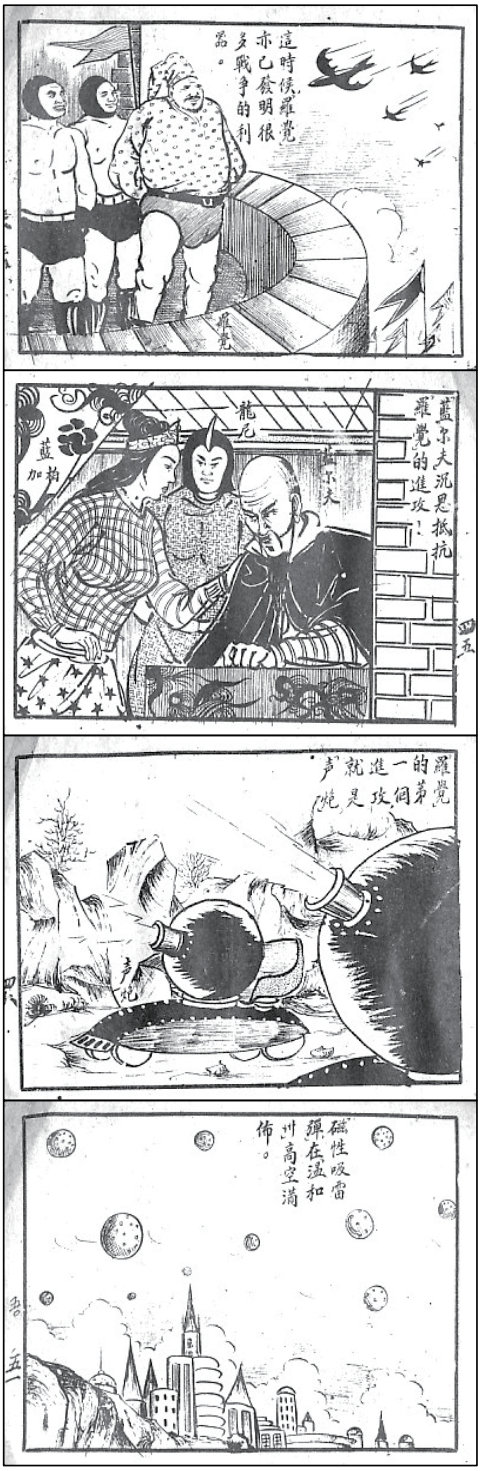
羅覚は、最初の温和国進攻作戦で、「声砲」という兵器を用いた。

これは、一種の音波砲である。その強烈な音波は、天をも揺るがすほど強力で、あらゆるものを破壊し尽くすのである（48齣）。

藍柏加たちは、「撮遠機」と呼ばれるテレビのスクリーンで、羅覚たちの進攻を観察していた。

藍爾夫は、「磁性吸雷弾」なるものを放った。無数の磁性吸雷弾が放たれると、それらは温和国の空高く上昇し、空域にまんべんなく配置された。それが配置されるや、強力な「電気の網」を発した（51齣）。

羅覚はみずからの兵士たちに対し、侵略を完遂するよう訓示をたれた。羅覚の兵隊たちは、電気ドリルで塹壕を掘り、またたくまに



侵略のための堡壘を完成させた。

羅覚は、次なる攻撃に移らんと、新兵器「電動飛雷」の発射ボタンを、みずからの指で押した。攻撃目標を温和国に設定された無数の電動飛雷は、ひたすら標的に向かって飛んでいった。

飛雷は、まっすぐ温和国の領空に侵入した。侵入するやいなや、まっさきに吸雷弾の「電気の網」の妨害を受けた（60齣）。

飛雷は、吸雷弾に接近すると、たちまちその磁性に吸い寄せられていった。

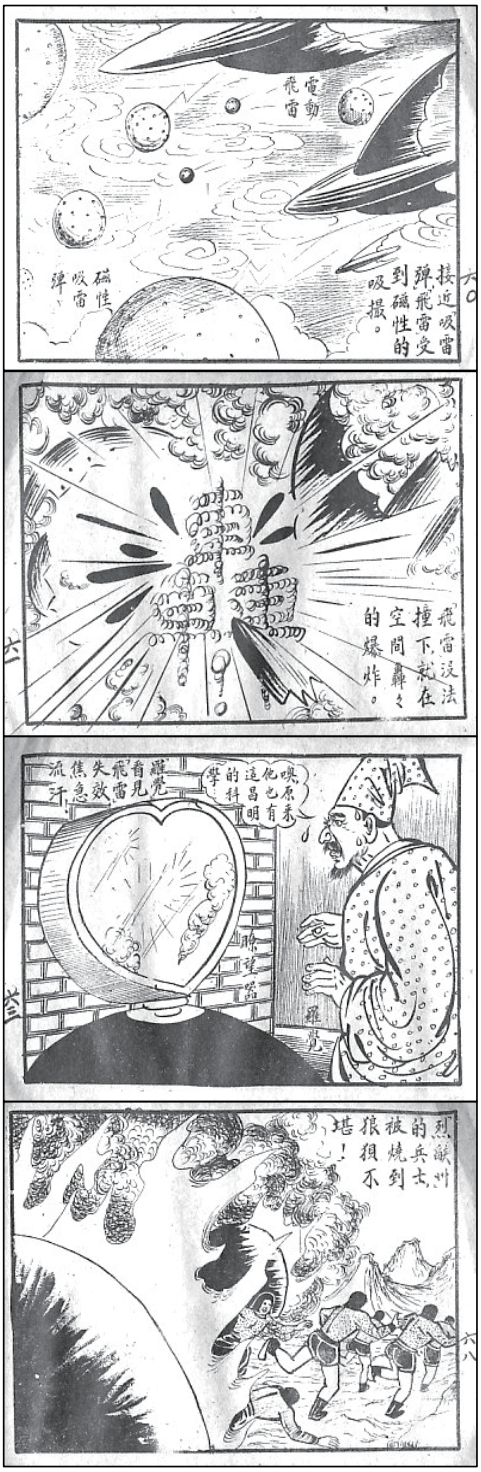
飛雷は、温和国の町をすこしも破壊しないうちに、空中で「轟」と音をたてて爆発したのであった。こうして電動飛雷は、その効力を完全に失ったのである（61齣）。

羅覚は、みずからの飛雷がまったく用をなさないうちに破壊されたのを、「瞭望器」なるテレビの、これまたおちゃめなハート型のスクリーンに見て、地団駄を踏んだのであった。「なんということだ！　むこうにも、こんなすごい発明があったとは！」

羅覚は、おもわず冷や汗をだらだらと流すのであった（63齣）。

羅覚は、ふたたび声砲戦車を出動させて、先鋒の兵士たちを掩護した。

温和国のほうは、これに対し、抗声大砲を用いて反撃した。抗声大砲の射程距離は遠く、威力もすさまじい。抗声大砲は声砲の音波攻撃をはね返して、逆に声砲戦車を焼き尽くした。烈炎国の兵隊どもは、ただただ逃げまどうばかりであった（68齣）。



二度の失敗に、羅覚はまた思案する。そうして、「掃雷針」を放ち、まずは敵の吸雷弾を排除することにした。

掃雷針は、自動的に目標に飛んでいく。温和国の上空に飛来した掃雷針は、吸雷弾を刺して、破壊する（73齣）。

こうして掃雷針は、任務を終えると、自動的にもとの基地にもどっていった。

藍爾夫は防空設備が破壊されたので、おもしろくない。羅覚の次なる攻撃に備えて、対策を思案する。

羅覚は兵士たちに言う。

「おまえたちは陣地を死守せよ。おれは飛行機で敵地に死光弾を放ち、温和国の首都を壊滅させよう」

羅覚は死光弾を搭載した飛行機「流星号」に乗り込み、爆撃に発進する（79齣）。

その速きこと、流星のごとし！

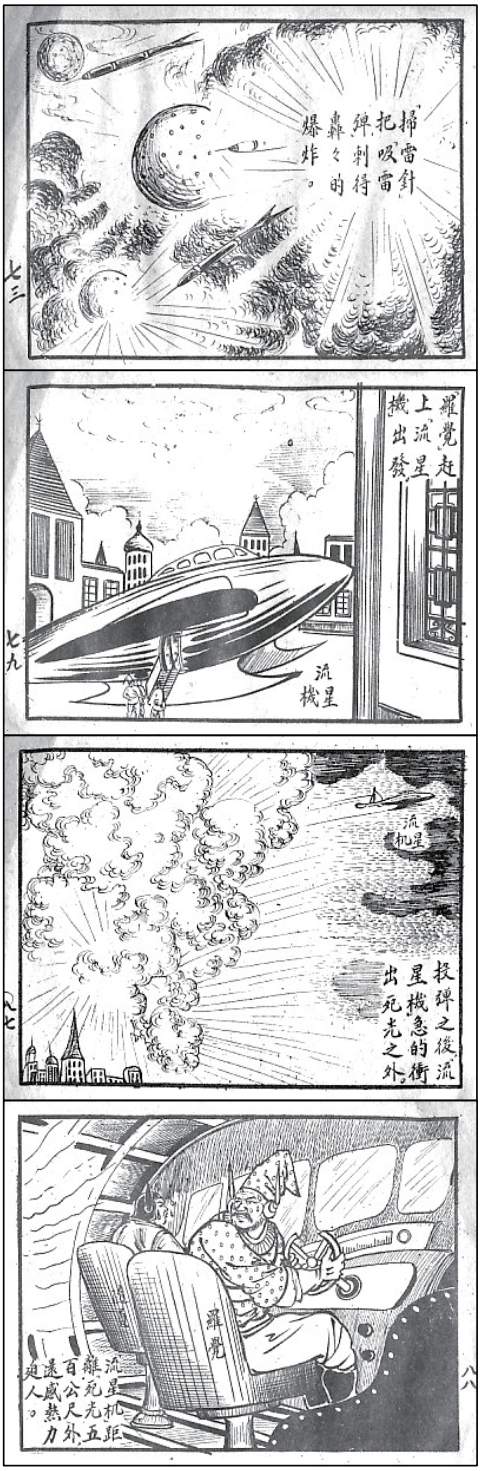
温和国の首都上空に飛んできた流星号、照明弾を放ち、目標を見定めると、死光弾を投下した。

その瞬間、首都は、目を突き刺すような強烈な光につつまれた。さらに閃光と高熱が、首都全域を覆った。

爆弾を投下すると、流星号は急いで死光の外に飛び出た（87齣）。

死光弾の爆発地点から500メートル以上離脱した流星号でも、激しい光熱に襲われるのであった。

操縦席の羅覚は、死光弾の恐ろしい威力を確認する（88齣）。



恐るべき死光弾は、徐々に都市を押しつぶしていく（89齣）。

激しい光熱のいたるところ、建築物は破壊され、人類は焼き殺された。逃げまどう首都の民衆（90齣）。

藍爾夫の家には、死光から守るシェルターが設置されてはいたが、それでも死光の激しい熱は、屋内に侵入してくるのであった。

熱が少し落ち着くと、藍爾夫と藍柏加は、外に出て、首都の様子を見てみた。

おお、なんということであろう！　あの美しい温和（ぬくぬく）国の首都は、廃虚と化しているではないか！

藍爾夫は怒りに燃えて言った。

「羅覚め！　あろうことか、科学の力を殺人に使うとは！」（92齣）

さいわいにして、藍爾夫は頭部に軽い怪我を負っただけですんだ。

しかし、死光弾投下時に外にいた龍尼は、重傷を負って、看護婦によって病院に運ばれた。（95齣）

藍柏加は、みずから夫の治療にあたった。その結果、龍尼は一か月の治療を経て、全快したのであった。

＊　　＊　　＊

連環画の物語はここで終わっている。火星での戦争は、その後どのようになったのであろうか？　それは、この作品が、より完全な形で発掘される日を待つしかない。

さて、勝手に妄想をたくましくするならば、藍爾夫、藍柏加そして龍尼の三人は、ひとまず地球に逃げて、捲土重来を待つのであろう。かれらがやたら地球に関心を抱き、あまつさえ、地球に行くために「火箭機」まで開発していたのは、その伏線に相違ない。加えて「大情人」なるタイトルからして、惑星を越えたロマンスに発展するのに相違ない！

隠していたが、じつは冒頭では、「この物語は、いまから六千年前の火星で発生した、ある、驚くべき事件である……」のあとに、次のような文言が綴られているのである。「この事件は、そのまま、わが国が五千年前にこうむった大災害に影響したのであった。すなわち、わが国において、天は西北が崩れ、地は東南が沈み、女媧が石を練って天の補修をしたが、これこそは、火星からもたらされた大災害によるものだったのである。信じる信じないは、あなた次第だ！」

なるほど、「地球」ではなく、「わが国」と言えるところは、さすがに中国である。「女媧補天」の神話は、火星戦争のとばっちりをうけたカタストロフィであったというのだが、これはやはり、烈炎国と温和国の戦争が、第二部では地球を舞台にして繰り広げられるということを暗示しているのではないだろうか。しかもそれは一千年もつづくというのであろうか？　もちろん信じるさ！

ちなみに、こんかいご紹介した物語の、「死光弾」の描写は、あきらかに「原爆」を意識して書かれたものであろう。

『火星大情人』の装幀は、民国末期の、香港の連環画の特徴を有している。紙は劣化し、触っただけで崩れ、粉末となる。今回、スキャンをすることで、本そのものは破損がかなり進んでしまった。しかしながら、不完全ながらも21世紀のよいこたちの目にさらされたことで、作品も本望であろうと、勝手に考えている。

奇文共欣賞　おもしろい文章があれば　みんなで楽しく味わって
疑義相與析　わからない言葉があれば　みんなで一緒に考えよう

陶淵明「移居」